



羽柴秀吉の弟秀長に仕え、天正十三年（一五八五）には大和郡山城に入城しています。作介もそれに従っていますので、作介が小堀町に住んでいたのは十年に満たない期間だった

ようです。現在、小堀町には「小堀新介殿屋敷跡」という石碑が建てられ、長浜市の史跡に指定されています。

5 小堀新介殿屋敷跡 15・16ページに掲載

ものがたり

# 遠州公と湖北

■絵／まるヲ 文／葉月蘭

豊臣から徳川の時代、あらゆる芸術に才能を発揮した小堀遠州は、長浜市小堀町に生まれている――

「小堀遠州」という名前は、湖北の人の多くが知っているでしょう。でも、じゃあどういふ人なの？ と問われると、首をかしげてしまうのではないかな。

小堀遠州は、豊臣から徳川の世を舞台に、茶道、造園、歌などにずば抜けた才能を発揮しました。あらゆる芸術に長け、「総合プロデューサー」ともいえる人だったようですが、本職はお奉行さん。武家の事務、なかでも建物の修繕や造営を担当する作事奉行として活躍しました。

また、徳川二代將軍秀忠、三代將軍家光の茶道指南役もつとめました。今もその事跡は各地の庭園などに見られますし、茶道遠州流は、十二代小堀宗慶氏、十三代小堀宗以氏へと受け継がれています。

遠州さんは、天正七年（一五七九）、坂田郡小堀村（現在の長浜市小堀町）に生まれました。父・小堀新介正次は土地の土豪、母は浅井家家老・磯野丹波守員正の娘で、幼名を作介といいました。父の新介は浅井氏の家臣でしたが、その後

1 將軍の茶道指南役。茶の湯の道第一人者として認められた遠州が將軍秀忠の指南役となるのは38歳のころ。その後家光が將軍職につくと、二人の指南役をつとめた。  
2 小堀宗慶氏。213ページにエッセイ掲載。  
3 小堀宗以氏。11・13ページにエッセイ掲載。  
4 磯野丹波守員正（生没年不詳）高月町磯野出身。浅井家に仕え佐和山城主となるが、姉川合戦時、長政の救援が得られず、信長方につく。近江新庄城主に取り立てられるが、後没取。

小堀遠州生誕の地、長浜市小堀町は、長浜市のほぼ中央に位置する。生家「新介屋敷跡」の碑は、町域の西南の端あたり、遠州会館と名付けられた小堀町会館の前にある。県道から少し北へ入ったあたりが昔からの町並み。慶長検地で幕府が使用した「近江小堀村絵図」そのままの地形が残っているというが、道幅の狭いところなど、いかにもそれらしい。晴れ上がった空よりも、時雨模様の似合いそうな道筋、私カナが小学校へ通った通学路だ。屋敷跡から少し東へ向かう。現在はおとなり宮司町の北の端となっている総持寺の境内も、もとは小堀家



小堀町の古い町並み

小堀町／南郷里小学校

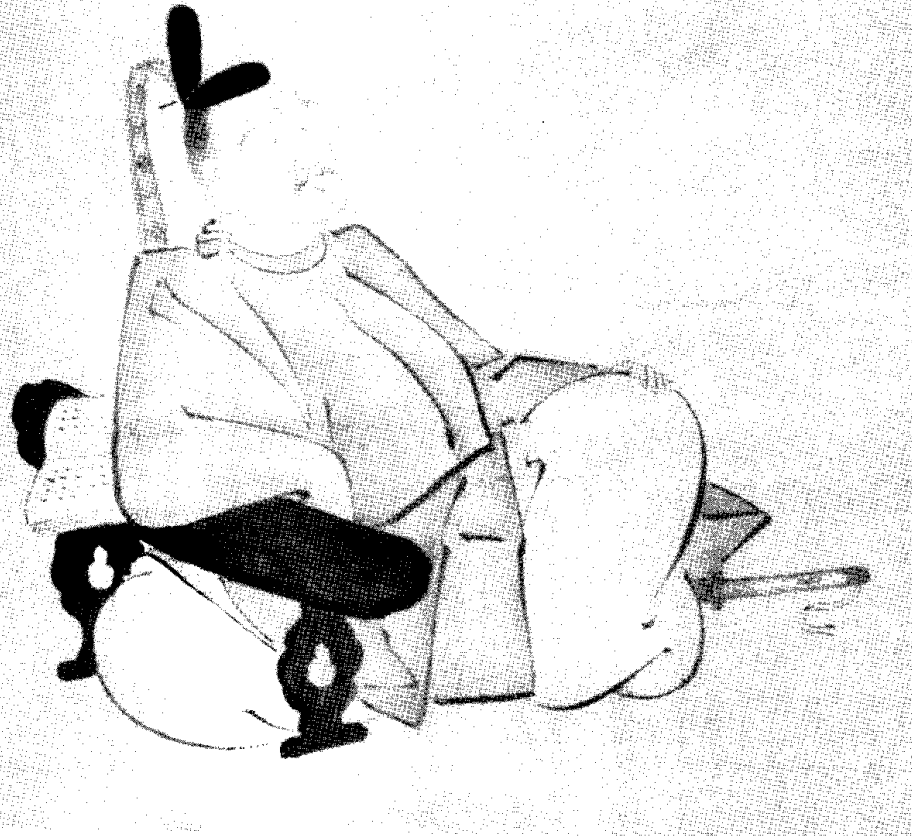
遠州流茶道を  
生誕地に復活させよう

古絵図そのままの地形が残る町内

長浜市小堀町

の土地であった。行基創建と伝えられるこの寺の再興（一四三三）に際し、小堀家の先祖光道が寄進したのだ。ちなみに、客殿から望む庭園は遠州流、池泉回遊式である。小堀町の町並みはさらに北東へと

遠州さんを旅する

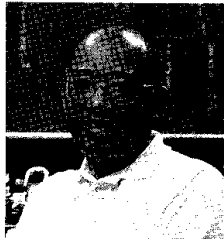


（遠江守正一宗南郷里土着像・部分）

遠江生まれの遠州さんは  
戦乱の世が過ぎた穏やかな時代、  
幕府の役職につきながら感性をみがき  
日本のあちこちらに奥深い足跡を記した。  
ここでは、生まれ故郷・小堀、終焉の地・京など  
ゆかりの地を巡ってみた。  
もしも遠州さんに会えたら尋ねたい。  
あなたの原風景は——と。

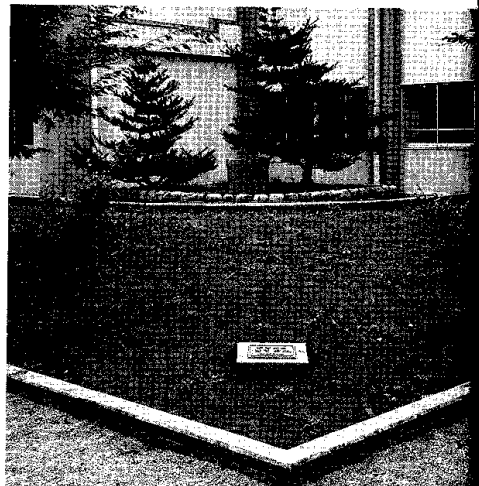
▼創立百周年に造られた「育ての泉」には、遠州流つくばいが配されている。

中村憲雄校長先生



広がり、北は川崎町、東は南田附町と接しているが、このあたりはいわゆる小堀新町。JA長浜市の敷地角に、遠州公をたたえる記念碑がひっそりと建っている。

しかし、目にするものはそこでネタ切れとなってしまう。小堀には七歳ごろまでしかいなかったとはいえ、何か彼の足跡らしきものはないか、と思いつくと、浮かんだものがある。歌だ。カンナの母校、長浜市立南郷里小学校の校歌には、小堀遠州その人の名が出てくるのだ。母校で遠州公の名がいかに伝えられているか、中村憲雄校長先生に何ってみた。



南郷里小学校（長浜市南田附町）  
二十年以上つづく記念碑の掃除

学区の中に、遠州公ゆかりの地を含む南郷里小学校は、現在百二十一年目という歴史ある学校だ。昭和五十年の創立百周年の際には、遠州流つくばいを配したモニュメント「育ての泉」が造られるなど、さまざまな記念事業が行われたが、校歌の改訂もそのひとつであった。作詩作曲を担当された川澄健一さん（滋賀県出身、NHK学校音楽コンクールなどの審査員を務められた）